

## 摩訶止観に於ける四種三昧の一考察

林 善 信

『摩訶止観』の五略十広は円頓止観を組織的に体系づけたものであつて、これにより智顗の法華円教の実践体系が完成したものと理解することができる。この五略の中、修大行の項でいわゆる四種三昧を設定し、これを円教の模範とすべき大行なりと規定した。四種三昧とは、(一)常坐三昧(二)常行三昧(三)半行半坐三昧(四)非行非坐三昧にして、これ等四行を縁となして「一心三観」の修道を行ずることをいう。『摩訶止観』卷二の修大行の總釈にて

法界是一処。正観能住不動。四行為縁。観心藉縁調直。故称三昧也。<sup>①</sup>

と述べている。即ち四行を縁となして心を観ずると云うことが円頓止観たる四種三昧の要道とみるべきであらう。

『摩訶止観』卷一上（円頓章）に

円頓者。初縁実相造境即中無不真実。繫縁法界一念法界。一色一香無非中道。己界及仏界衆生界亦然。……法性寂然名止。寂而常照名観。雖言初後無二無別是名円頓止観。<sup>②</sup>

という。智顗が『法華玄義』にて心と仏と衆生とを三法妙として掲げこの三法を基として仏道に入ることを説いているのであつて、『摩訶止観』に「不欺仏、不負心、不誑衆生」<sup>③</sup>といっていることと相俟つて実に仏道の精要を顕わしてをり、解脱への道は此の三法を基とするものであることが解る。「四行為縁。観心……」ということは智顗が實際の修行の場合には現実の心法を観るべきことを唱導して円頓の妙理を實現せんとするものである。いわゆる我等が如実に自己の心を観ずるとき、そこに一切衆生と仏とを観るのであつて、この三者は各々それ自身の内部に他の二者を本来具足するが故にその一つを徹底すれば他の二者は自然に実現することになるわけである。

四種三昧即ち常坐、常行、半行半坐、非行非坐は一行、仏立、方等法華、隨自意の三昧ともいう。前者は行法に約し後者は經法に約して分類したものである。又これ等三昧を四種に分類したことは智顗が常に用いる四門分別に順じたことは

容易に推察出来ることである。すでに述べたように四種三昧は心を観ずるための縁、即ち一心三観を修し、解脱に達するための縁であつて、いわば仏道を成就せしめる具体的修道の行法である。

『摩訶止観』ではこの大行を修するためにそれぞれの三昧に身口意三業についての詳細な軌行を設け、身の開遮、口の説黙、意の止観を論じ最後に此等三昧の行の功德を讃じて勸修を説くという順になつてゐる。此等三昧の具体的行法はもとより戒定慧の三学と称せられる修行の基本を貫くものではあるが、ここで更に仏道が成就する道程として三種の内面的要素を見出し得るのではないかと思う。

〔其の一〕は身の開遮と口の説黙においてである。これ等詳細な規定は日常的現実を超越して円教に基く自己本来の面目に肉薄しようとするものである。この嚴肅な軌行は極めて意味的体验を尊重するもので仏道実践の第一段階ともいふべく必然的に「意の止観」を喚起するところのものである。

〔其の二〕は第二段階として意の止観においてである。意の止観は円教の実相を観心によつて現証するをもつて、諸法の現れの当相と当処がそのまま実相の顯現であり、随つて理事相即し、一法中に一切法の性相が本来具足するとみる。いわば高次の現実主義で万有を永遠の相の下に見る観想が体験の中心に座を占めており極めて理智的作用である。

#### 摩訶止観に於ける四種三昧の一考察（林）

然るに意の止観にて得られる「煩惱即菩提」とか「生死即涅槃」の原理は観想のみではいまだ体証したとはいひ難く、随つて念々に精進し嚴肅な修行が必要になつてくるわけである。そこで勸修として三昧の行の功德を説き勤行精進が闡説される所以がある。以上修道の実際問題としては第一段階から第二段階への繰返しで嚴修することの外はないのであつて、円教の基本的実践体系は一応これをもつて完結するわけである。

しかし、ここで更に四種三昧を通じて感知されることは三昧の所依や目的、又は行規として仏、菩薩を規定していることにおいてである。

常坐三昧では

当専称一仏名字慚愧懺悔以命自歸。

といい、常行三昧では

九十日口常唱阿弥陀仏無休息。九十日心常念阿弥陀仏無休息。

といい、更に半行半坐三昧には

法華云。其人若行若立誦誦是經。若坐思惟是經。我乘六牙白象現其人前。

といい、ここに云う六牙の白象に乗ずるは普賢菩薩である。また非行非坐三昧においては

当正向西方五体投地礼三宝七仏釈尊弥陀。三陀羅尼三菩薩聖衆。

……合十指手誦四行偈竟。又誦三篇呪。

等である。

ここに「其の三」として提示する所依の仏菩薩は、仏道の第一歩として言われる三宝帰依の精神とその次元を異にするはいふまでもない。しかしこれ等を単に第一段階における行規上の仏菩薩とみるか、又は第二段階における一心三観の原理から仏菩薩を理観化し主体的に得べき精神上の能力として象徴的にのみ解するか、ここに問題がある。四種三昧の行道を通じてみられる所依の仏菩薩には絶対的な帰依と信仰の精神がある。主体的に得べき精神上の能力として摂取されるものでなくあくまで行者の前に立つ仏菩薩である。それは行者の自己一心の内部における有限と無限との弁証に直面する自内証ともいふべく、身の開遮、口の説黙、意の止観をして成就せしめる根本的立場である。

以上の三種の要素は三契機として各契機を媒介包蔵する關係にある。この論文は意の止観についてのみ考察を加えるが、それは円頓止観にありて意の止観が各契機の統一的立場にあつて、一心三観の修道をあらわすものだからである。

さてこの四種三昧の行法はいかなる意図に基いて組織されたものであろうか。五略十広というように十乘観法との間に論述の内容からすれば広略の相違として理解し得ても四種三昧の行相は一見した限り、任意の諸経に拠つて構成されているが如き観を与える。随つて一心三観を修するに四種三昧中

任意の行法によつて可能となり、四種三昧は無秩序な組織の如く感ぜられるであらう。そもそも天台の教理を實踐する観心門は頓・漸・不足の三種止観をもつてその体系となしてゐる。『摩訶止観』の別序に

天台伝南岳三種止観。一漸次。二不定。三円頓。皆是大乘。俱縁実相同名止観。

とあり、漸次止観とは次第順序によつて止観する方法で現存の『釈禪波羅蜜次第法門』に説かれ、不定止観とは前後更互に止観する方法で『六妙法門』の如きがそれであつて、円頓止観を組織的に論述するのが『摩訶止観』であり、止観の實踐法を四種に分類したものが四種三昧の行法ということになる。意の止観の論述内容からみて三種止観の体系を円頓止観の中に応用し、頓、漸、秘密、不定の四門分別に順じて考察され得るのではないかと考えられる。……以下略……

|   |               |
|---|---------------|
| 1 | 大正蔵四十六卷十一頁上   |
| 2 | 大正蔵四十六卷一頁下二頁上 |
| 3 | 十一頁中          |
| 4 | 十一頁中          |
| 5 | 十二頁中          |
| 6 | 十三頁上          |
| 7 | 十四頁上、十五頁上     |
| 8 | 一頁下           |